

## 【D年】聖霊降臨節第13主日(2020年8月23日)

## 【旧約聖書日課】ヨブ記 28章12～28節

- 12 では、知恵はどこに見いだされるのか  
分別はどこにあるのか。
- 13 人間はそれが備えられた場を知らない。  
それは命あるものの地には見いだされない。
- 14 深い淵は言う  
「わたしの中にはない。」  
海も言う  
「わたしのところにもない。」
- 15 知恵は純金によっても買えず  
銀幾らと価を定めることもできない。
- 16 オフィルの金も美しい縞めのうも  
サファイアも、これに並ぶことはできない。
- 17 金も宝玉も知恵に比べられず  
純金の器すらこれに値しない。
- 18 さんごや水晶は言うに及ばず  
真珠よりも知恵は得がたい。
- 19 クシュのトパーズも比べられず  
混じりない金もこれに並ぶことはできない。
- 20 では、知恵はどこから来るのか  
分別はどこにあるのか。
- 21 すべて命あるものの目にそれは隠されている。  
空の鳥にすら、それは姿を隠している。
- 22 滅びの国や死は言う  
「それについて耳にしたことはある。」
- 23 その道を知っているのは神。  
神こそ、その場所を知っておられる。
- 24 神は地の果てまで見渡し  
天の下、すべてのものを見ておられる。
- 25 風を測って送り出し  
水を量って与え
- 26 雨にはその降る時を定め  
稲妻にはその道を備えられる。
- 27 神は知恵を見、それを計り  
それを確かめ、吟味し
- 28 そして、人間に言われた。  
「主を畏れ敬うこと、それが知恵  
悪を遠ざけること、それが分別。」

## 【使徒書日課】

## コリントの信徒への手紙一 2章11節～3章9節

- 211人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。12わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。13そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、「霊」に教えられた言葉によっています。つまり、霊的なものによって霊的なことを説明するのです。14自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。15霊

の人は一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されたりしません。

- 16「だれが主の思いを知り、主を教えるというのか。」しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています。3兄弟たち、わたしはあなたがたには、霊の人に對するようには語りことができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に對するようには語りました。2わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にするのができなかったからです。いや、今でもできません。3相変わらず肉の人だからです。お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。4ある人が「わたしはパウロにつく」と言い、他の人が「わたしはアポロに」などと言っているとすれば、あなたがたは、ただの人にすぎないではありませんか。5アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。6わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。7ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。8植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることになります。9わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書7章40～52節

- 40この言葉を聞いて、群衆の中には、「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、41「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。「メシアはガリラヤから出るだろうか。42メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」43こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。44その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。45さて、祭司長たちやファリサイ派の人々は、下役たちが戻って来たとき、「どうして、あの男を連れて来なかったのか」と言った。46下役たちは、「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えた。47すると、ファリサイ派の人々は言った。「お前たちまでも惑わされたのか。48議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。49だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている。」50彼らの中の一人で、以前イエスを訪ねたことのあるニコデモが言った。51「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」52彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨブ記 28章12～28節

- 12 では、知恵はどこに見いだされるのか  
分別はどこにあるのか。
- 13 人はそこに至る道〔LXXその値〕を知らない。  
生ける者の地には見いだされない。
- 14 深い淵は言う  
「それは私の中にはない」と。  
海は言う  
「私のところにもない」と。
- 15 知恵によって純金を得ることはできず  
銀がその値として量られることもない。
- 16 オフィルの金でも、高価なカーネリアンや  
ラピスラズリでも引き換えにできない。
- 17 金もガラスもそれに比べることはできず  
純金の器もそれと交換できない。
- 18 さんごと水晶は言うに及ばず  
知恵から得るものは真珠にまさる。
- 19 クシュのトバースもそれに比べることはできず  
純金でも引き換えにできない。
- 20 では、知恵はどこから来るのか  
分別はどこにあるのか。
- 21 それは生ける者すべての目に隠され  
空の鳥にも隠されている。
- 22 滅びの国も死も言う  
「私たちは耳でそれを伝え聞いたことがある。」
- 23 神はその道を悟り  
神がその場所を知っておられる。
- 24 神は地の果てまで目を凝らし  
天の下をことごとく見ておられる。
- 25 神は風に重さを与え  
水を秤で量る。
- 26 雨には定めを  
稲妻には道を与えたとき
- 27 神は知恵を見て、これについて語り  
これを確かめ、探し出した。
- 28 そして、人に言われた。  
「主を畏れること、これが知恵である。  
悪を離れること、これが分別である。」

コリントの信徒への手紙一 2章11節～3章9節

211人の内にある霊以外に、一体誰が人のことを知るでしょう。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。12私たちは世の霊ではなく、神の霊を受けました。それで私たちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。13この賜物について語るにも、私たちは、人の知恵が教える言葉ではなく、霊が教える言葉を用います。つまり、霊によって霊のことを説明するのです。14自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊に属する事

柄は、霊によって初めて判断できるからです。15霊の人は一切を判断しますが、その人自身は誰からも判断されたりしません。

16「誰が主の思いを知り  
主に助言するとかの。」  
しかし、私たちはキリストの思いを抱いています。  
3きょうだいたち、私はあなたがたには、霊の人に対するように語る事ができず、肉の人、つまりキリストにある幼子に対するように語りました。  
2私はあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかったからです。いや、今でもできません。3相変わらず肉の人だからです。互いの間に妬みや争いがあるかぎり、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。4ある人が「私はパウロに付く」と言い、他の人が「私はアポロに」と言っているようでは、あなたがたはただの人ではありませんか。5アポロとは何者ですか。パウロとは何者ですか。二人は、あなたがたを信仰に導くために、それぞれ主がお与えになった分に応じて仕える者です。6私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です。7ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神なのです。8植える者と水を注ぐ者は一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受けます。9私たちは神の協力者、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

ヨハネによる福音書7章40～52節

40この言葉を聞いて、群衆の中には、「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、41「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。「メシアがガリラヤなどから出るだろうか。42メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」  
43こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。44その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。  
45さて、祭司長たちやファリサイ派の人々は、下役たちが戻って来たとき、「どうして、あの男を連れて来なかったのか」と言った。46下役たちは、「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えた。47すると、ファリサイ派の人々は言った。「お前たちまでも惑わされたのか。48議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。49だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている。」50彼らの中の一人で、以前イエスを訪ねたことのあるニコデモが言った。51「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」52彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者が出ないことが分かる。」

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・8月23日「聖霊降臨節第13主日」の日課主題は「神からの真理」。新共同訳において「真理」と訳される語は、通例、旧約（ヘブライ語）では「エメート」（「アーメン」（アーメン）の派生語）、新約（ギリシア語）では「アレテュイア」であるが、用例数では旧新聞で大差があり、新共同訳では、旧約で10例、新約で80例である（文書の全体量で、旧約は新約の3倍ある）。「真理」と関連して用いられる「知恵」の用例と比較すると、さらに顕著な違いがみられる。「知恵」は、新共同訳では、旧約で230例以上、新約では60例が数えられる。すなわち、日本語訳において、「真理」と「知恵」は、新約では用例数に大きな差はないが、旧約では圧倒的に「知恵」の用例が多い。これは、「真理」に相当する用語と概念が、ギリシア語文化と強い結びつきを持つことによると考えられ、旧約における「知恵」（ヘブライ語で「ホクマー」）を理解する上で、「知恵」（ギリシア語で「ソフィア」）や「真理（アレテュイア）」の語を用いて概念を継承しようとしたのであろう。

・旧約において「知恵（ホクマー）」の語は、比較的広く用例が見いだされるが、集中しているのは、いわゆる「知恵文学」と呼ばれる「ヨブ記」「箴言」「コヘレトの言葉」である。それ以外の文書で注目する用例としては、①「出エジプト記」における幕屋建設に関連して熟練技術者が「知恵」を有する者として描かれる、②モーセの後継者ヨシュアがモーセの按手（霊的権能の継承）のゆえに「知恵の霊に満ちていた」（申34:9）と描かれる、③ソロモン王が即位にあたって神から賜物として「知恵」を授けられ統治に生かしたとされる（王上3~10章など）、などが挙げられる。特に「ソロモンの知恵」は、「知恵文学」の権威の拠り所とされており、各文書の標題には、ソロモンの名、またはソロモンを示唆する表現が用いられている。

・旧約で「知恵」と密接な関連のある用語に「分別」（ヘブライ語で「ビーナー」）がある。「分別」の用例は、「知恵」とセットである場合が多く、「ヨブ記」と「箴言」に集中して見られる。

・新約において「知恵（ソフィア）」の用例は、比較的広く見られるが、ヨハネ福音書およびヨハネ書簡には用いられず、一方でパウロ書簡には多く用いられている。これに対して、「真理（アレテュイア）」の用例も、比較的広く見られるが、ヨハネ福音書およびヨハネ書簡で顕著に多く用いられ、パウロ書簡でも用例は少なくない。「真理」がヨハネ文書（福音書・書簡）を特徴づける用語であることは明白であるが、「知恵」を用いない理由は不明である。パウロ書簡のように両語を適宜使い分けることもできたはずであるが、あえて「知恵」を避けているのは、当時のヨハネの教会共同体が置かれた状況の中で、敵対するグループが何らかの「知恵」を喧伝する主張をしていたからかもしれない。

**旧約日課（ヨブ記28章より）**

・「ヨブ記」は、旧約中「諸書」に区分される文書。「箴言」や「コヘレトの言葉」などのようにソロモンの名やそれを示唆する表現は付されていないが、「知恵」に関して「箴言」と共通の主張や表現を有しており、ひとつの「知恵文学」の伝統の中で編集・編纂されたと考えられる。本書の全体構成は、1~2章および最終42章に「ヨブ物語」が置かれ、これに挟まれるように、ヨブと友人らの対話、および神の宣言という形式で、おもに「神義論」をめぐる思索が語られる。この部分でたびたび取り上げられるのが「知恵」で、日課箇所は、そのような部分の一つ。

・ヨブと友人らとの対話は、三巡重ねて描かれるが、日課箇所は三巡目に「シュア人ビルダド」が主張したことに対してヨブが応答する中に置かれている。日課箇所の前段では、人が鉱山から価値ある鉱物を掘り出すことのできる者であることが述べられている（1~11節）。それに対して、人は本当に「知恵」を見出しえるのだろうかという問いが、日課箇所ですべて述べられている。それに対する答えは、何らかの議論を経ることなく、端的に「知恵」が「神」に帰されるものであるという主張に落ち着いている。ことに28節の定型句的な表現は、「箴言」的伝統の中からの引用であることが明白である（箴言1:7、9:10など参照）。

・このような主張に落ち着くのは、これまでの友人との対話でヨブがしばしば懐疑主義的な問いを発し、堂々巡りとも思える議論に終始してきたことを見ると、違和感を覚える。日課箇所のように神への信頼を主張すれば、ある意味ですべての議論に終止符が打たれるはずであるが、これまでの対話では、そのような主張は繰り返されていない。むしろ、ここには、これまでの対話で「知識」や「知恵」が懐疑論的に用いられてきたことを踏まえて、（ヨブの議論の一貫性を失わせても）、「箴言」的伝統に基づいた「知恵」理解を楔として打ち込むために置かれていると見ることができる。

**使徒書日課（Iコリント2~3章より）**

・「コリントの信徒への手紙一」は、「手紙二」と共に、使徒パウロが自ら開拓創設したコリントの教会に宛てて、教会で起こっていた混乱などへの対処に助言を与える目的で記された一連の書簡の一つ。日課箇所は、1:10以下の段落で提示された「教会内の仲間割れ」という問題に対して、「福音宣教論」を踏まえて助言を示そうとしている中の一部。一連の論述は3:23まで続いている。

・コリント教会で生じていた仲間争いは、1:12で示されているように、表面的には、自分たちの指導者を誰と見るかということによっていた。教会の開拓創設はパウロらの手に拠っていたが、パウロと同様に宣教者として活動していたアポロが後から来訪し、パウロよりもアポロを支持する信者が、パウロ支持派と対立する

ようになったのだろう。さらに、使徒ペトロ(ケファ)も諸教会を巡って生前の主イエスを知る弟子としての特別な権威をもって教えていたので、その教えをパウロやアポロの教えに優越すると考えたグループもあったと考えられる。なお、この 1:12 に出てくる「わたしはキリストに」〔直訳＝「わたしはキリストのもの」〕は、「キリスト派」と呼びうるようなグループがあったということではなく、3:23 で「あなたがたはキリストのもの」という結論に至るための「仮定」的提示として並べられていると考えられる。

・アポロという宣教者については、使徒言行録にも伝えられており(使徒 18:24 以下)、初代教会で重要な役割を果たしていたと考えられるが、彼の名による書簡などの文書が残されておらず、詳細は不明な人物である。伝承では、雄弁家として知られた人物であったので、ユダヤ人でありながら「アポロ」という非常にギリシア風の名で呼ばれていることなどからして、ギリシア的な知恵者・哲学者(いわゆる「ソフィスト」)の伝統を学んだ人物であったと考えられている。

・このアポロに関する見方は、パウロが「人の知恵に教えられた言葉」と「霊に教えられた言葉」とを対照させていることとも関連する。パウロは、自らの福音について「宣教という愚かな手段」によるものだと述べ(1:21)、そこに「神の知恵」があること、それによって神が「世の知恵」を無に帰されたことを、宣教論として述べている(1:18 以下)。ただし、パウロは、それがアポロ的(ギリシア的)な知恵・知識を全く退けることを意味するのではない、と多少の軌道修正をするために 2 章で論を転じ、日課箇所に至っている。

### 福音書日課(ヨハネ 7 章より)

・日課箇所は、仮庵祭にエルサレムに上ってきた主イエスが人々の前で教えはじめ、さらに、「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日」(7:37)に大勢の前で「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」と宣言されたことを受けて、ユダヤ人の間に支持派と反対派の対立が生じたことを描いている。

・人々の議論の焦点として、主イエスが「メシア(キリスト)」＝「油注がれた者」であると言えるのかどうかという神学的問いが置かれている。「メシア」の出自に関する議論は、マタイ福音書が降誕物語の中で律法学者らが聖書に基づいた理解を提示しているように(マタイ 2 章)、当時のユダヤ教界隈では、重要な神学問題であった。主イエスの出身地については、「ガリラヤのナザレ」であることが周知の事実であったので、聖書の根拠に基づいて「ダビデの町＝ベツレヘム」と主イエスの関係を示す必要に迫られたという事情も、初代教会にはあった。ヨハネ福音書は、主イエスの出生地を「ベツレヘム」であるとする根拠の不明な伝承を取り上げることに興味がない。むしろ、ヨハネ福音書は、根源的な「出身地」として、「父」である神のもとから遣わされたという視点を、集中的に示している。

・日課箇所後半は、場面がユダヤ人の議員たちの集まり(つまり「最高法院」)を示唆するものとなっているが、その構成員としてすでに 3 章で登場させた「ニコデモ」を描き、その主張を述べさせている。ニコデモは、「アリマタヤのヨセフ」と共に「イエスの弟子でありながら…そのことを隠していた」(19:38)人物として描かれているが、穏健な主張をすることで主イエスの仲間であることを周囲から疑われている。これらの「ニコデモ伝承」は、おそらく、初代教会に加わったニコデモ自身の証言に基づいたものであったと考えられるが、ヨハネ福音書は、この人物を一つのモデルとして、主イエスと弟子との関係性の進展を描こうとしているのだろう。いわゆる十二弟子とは異なる形での「弟子入り」の経緯は、新しい信者にとってより身近なモデルになり得たはずである。

### 来週の誕生日 (8 月 23 日～29 日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-417 番「聖霊によりて」(＝□95 番、□31 番「みたまによりて」)は、おそらく 1960 年代にルター派の P.シオルテスによって青年伝道用に作詞作曲された讃美歌。収録歌集にはギターコードが付されている。
- ・21-543 番「キリストの前に」(歌詞＝I 537「わが主のみまえに」)は、1881 年版『讃美歌』編纂に際して奥野昌綱が作詞、当初は「しずけき祈りの」(21-495 番)の曲、1903 年版『讃美歌』からは「わが主のみまえに」(I-537 番)の曲で歌われてきたものだが、『讃美歌 21』編纂に際して大幅に改作した歌詞に高浪晋一が新しい曲をつけた。

#### 21-417「聖霊によりて」

### We are One in the Spirit

1. We are one in the Spirit, we are one in the Lord.  
We are one in the Spirit, we are one in the Lord.  
And we pray that all unity may one day be restored,  
and they'll know we are Christians by our love, by our love.  
Yes, they'll know we are Christians by our love.
2. We will walk with each other, we will walk hand in hand.  
We will walk with each other, we will walk hand in hand.  
And together we'll spread the news that God is in our land.  
and they'll know we are Christians by our love, by our love.  
Yes, they'll know we are Christians by our love.
3. We will work with each other, we will work side by side.  
We will work with each other, we will work side by side.  
And we'll guard each man's dignity and give up all our pride.  
and they'll know we are Christians by our love, by our love.  
Yes, they'll know we are Christians by our love.
4. So all praise to the Father from whom all things come.  
And all praise to Christ Jesus, His only Son.  
And all praise for the Spirit who makes us one.  
and they'll know we are Christians by our love, by our love.  
Yes, they'll know we are Christians by our love.